虚構の中の「王昭君」

尾上兼英

一

古來政略結婚は數え切れない。中國においてもいわゆる〝四美人〟のうち、楊貴妃を除く三人、西施は越王勾踐から吳王夫差へ講和のために贈られ、貂蟬は董卓と呂布を離間するために利用され[1]、王昭君は對外政策のために匈奴に嫁した。

中國を圍む少數民族へ嫁した例は、漢の劉細君、唐の文成公主などがある。また魏の蔡琰は夫の死後匈奴に捕えられたが、魏の武帝が金璧を贈って購い、歸國後に再嫁させている。

細君・蔡琰の二人には、自作の作品というのが殘されており、その心情の一端が伺われる。

細君の「烏孫公主歌」は、

吾家嫁我兮天一方　遠托異國兮烏孫王
穹廬爲室兮旃爲牆　以肉爲食兮酪爲漿
居常土思兮心內傷　願爲黃鵠兮歸故鄉

ここには、風土、習俗の相違に耐えられず、切々たる望鄉の思いが訴えられており、讀む人の心を打つ。

蔡琰の「胡笳十八拍」は、匈奴に捕われの身になった原因を、「我生之初尙無爲、我生之後漢祚衰。天不仁兮降亂離、地不仁兮使我逢此時……」と說き起こし、「戎羯逼我兮爲室家、將我行兮向天涯。雲山萬重兮歸路遐、疾風千里兮揚塵沙……」以下匈奴の人情、風俗に耐え難い思いをつのらせ「鴈南征兮欲寄邊心、鴈北歸兮爲得漢音」とひたすら故鄉を慕うが「夜聞隴水兮聲嗚咽、朝見長城兮路杳漫。追思往日兮行李難……」と諦めざるを得ず、遂に「我不負天兮天何配我殊四、我不負神兮神何殛我越荒州。……怨兮欲問天……」と天や神に怨みを述べるにいたる。この胡漢の對立の期間に、胡人の子二人を生む。

やがて、胡漢兩國の和議が成立し「忽逢漢使兮稱近詔、遣千金兮贖妾身。喜得生還兮逢聖君、嗟別二子兮會無因……」と歸國の喜びと二人の子との別れの辛さ「一步一遠兮足難移、魂消影絕兮恩愛遺」という矛盾に陷る。つまり「舊怨平兮新怨長」の狀態に置かれたわけで、「願歸來兮天從欲、再還漢國兮歡心足」の喜びも「子母分離兮意難任、同天隔越兮如商參、生死不相知兮何處尋」、せめて「山高地闊兮見汝無期、更深夜闌兮夢汝來斯」と願っても「夢中執手兮一喜一悲、覺後痛吾心兮無休歇時」であり「胡與漢兮異域殊風、天與地隔兮子西母東。苦我怨氣兮浩於長空、六合離兮受之應不容」と子を思う親の悲しみのほうに重點が移るのである。

蔡琰の場合は、本人の意に反して匈奴に嫁した事情があるとしても、望郷に關しては細君と同様であり、歸國の喜びも子どもとの別離のために減殺されている。

二

王昭君には、自作の作品がない。[2]『漢書』の傳えるところに依れば、匈奴の內紛に呼韓邪單于の要請を受けた漢軍の應援により、宿敵郅支單于を倒した呼韓邪單于が謝恩のために、竟寧元年（前三三年）春正月、漢廷に來て、「かねて天子に拜謁したいと願っておりましたが、郅支單于が烏孫と連合して攻擊して來るのを警戒し、漢に來ることができませんでした。いま郅は既に誅に伏しましたのが、朝見を願いでた次第です」（匈奴傳下）と上書すると元帝は「匈奴の郅支單于は禮義に背いたが、既にその辜に伏し、呼韓邪單于は恩德を忘れず、禮義を慕って朝賀の禮を修復し、國境の平和を保ち永遠に戰場としないことを願いでた。そこで、年號を竟寧と改め、單于に待詔掖庭（郡國から推薦されたが、天子の寵愛のまだ及ばぬ後宮の女性）の王嬙を閼氏として與えよう」（元帝紀）と應じている。

また、昭君は、呼韓邪單于に嫁して後、寧胡閼氏と稱され、伊屠智牙師という男兒一人を生んだが、呼韓邪單于は建始二年（前三一年）に死んでいる。昭君は單于を繼承した復株累若鞮單于と再婚し、爲須卜居次、當于居次の二人の娘を生んだ。（匈奴傳下）[3]

これに對して、『後漢書』では、

元帝は良家の娘を選んで後宮に入れたが、呼韓邪が來た時に宮女五人を與えるといった。昭君は後宮に入って數年經たが召されることがなかったので、それを怨み悲しみ、宦官に賴んで「求行」した。呼韓邪が歸國する際に大宴會が開かれ、元帝が宮女五人を召して見せたが、昭君の容姿や立居振舞いは宮殿を輝かすばかりであり、見る者にショックを與えた。元帝も驚いて引き留めたいと思ったが、「難於失信」、匈奴に與えた。

嫁して、二人の子を生んだが、呼韓邪の死後、前夫人の子が位を繼承すると、妻となることを求めた。昭君は上書して歸國を望んだが、成帝は「從胡俗」と命じたので、また閼氏となった。（南匈奴傳）[4]

以上が正史の傳える昭君の記事であるが、『漢書』と『後漢書』の間には三百餘年の隔たりがあるので、多少の吟味が必要であろう。

昭君の籍貫は、『漢書』の應劭注と『後漢書』は一致するが、『漢書』が名は嬙、字は昭君とするのに對して、『後漢書』は逆にしている。

昭君が匈奴の地に赴いての後は、傳えられる僅かな消息に依ったと思われる。子どもの數について『後漢書』が「二子」とするのは、單なる誤記の可能性がないではないが、『漢書』の再婚後の娘二人との混同が考えられる。

元帝が呼韓邪單于に與えた宮女の數が『後漢書』では五人とあるが、昭君以外の消息についての記述が見られない。

昭君が呼韓邪單于との婚姻について、志願したというのは新たに附されたものである。

昭君の容姿が、宮廷の側近を含め元帝を驚かせたというのも新しい記述である。

元帝が引き留めたいと思ったというのも『漢書』には見えない。

呼韓邪單于の死後、前夫人の子との婚姻について、成帝が「從胡俗」と命じたことも、『漢書』の昭君に關する部分には見えない。こ

とこのは、烏孫公主、細君の傳に見える。

細君は「乘輿服御物」を賜わり「官屬宦官侍御」數百人を伴ってにぎにぎしく嫁して右夫人となったが、烏孫王昆莫は老齢でありことばは通じないので望郷の思いを募らせた。武帝は慰問のために「帷帳錦繡」などを贈ったが歸國の願いは許さなかった。昆莫は孫の岑陬と再婚させようとしたので、細君は上書して武帝に訴えたが、その返事は「從其國俗」であった。武帝は烏孫と協力して胡を討伐しようと考えていたので、細君の死後、楚王戊の孫、解憂を岑陬に嫁さしめている。(『漢書』西域傳下)

成帝が昭君に「從胡俗」といったのは、この先例にならったものであろう。正史であるからには、依るべき根據があってのことと考えるべきであろうが、『後漢書』で附加された要素を見ると、兩書の中間で採取された傳承の存在が豫想される。

その一つが蔡邕の『琴操』である。

王昭君の容貌の優れていることは齊國に鳴り響いていたが、後宮にはいって五、六年も召されなかったのでわざと化粧もしなかった。元帝の問に「匈奴の地には珍奇、怪物すべて揃っているが、美人がいない」と單于の使者が答えたので、後宮に單于のところに志願して行く者を募ったところ、昭君が「幸いに後宮に入れられましたが、容貌も醜く品も備わらず、陛下のお心に添いませんので、行かせたいただきたく存じます」と名乘りでた。元帝は、その容姿に驚き後悔したが後の祭りであった。

なお、單于の死後、昭君の子の世違が後繼者になったが、胡の習俗では父の死後母を妻とするので、「おまえは漢人か、胡人か」と尋ねると、「胡人でありたい」と答えたので、昭君は服毒自殺したという新たな要素を加えている。

また、葛洪の『西京雜記』では元帝の後宮は人數が多かったので、畫家に肖像畫を描かせ、それに依って寵愛したので、宮女は爭って畫家に賄賂を贈り寵を競ったが、昭君はそれに加わらなかった。そのため、匈奴が美人を求めたときに元帝は王昭君を選んだが、容貌は後宮第一であるうえ、應對もよく擧止も上品で、元帝は後悔したが、名籍を定めたからには、「帝重信於外國」、人の差替えはしなかった。腹いせに宮廷の繪師五人をすべて處刑したとあり、昭君が召されなかった理由として、繪師の介在という新たな要素を加えている。

王昭君像は、これらの要素を基礎にして作られ、後世の昭君説話が組み立てられるのである。

三

詩歌の世界においても、志は「實」であろうと「虛」の世界の構築であるので、昭君傳説は作者それぞれの境遇、時代を反映している。文人の作品として古いのは、晉の石崇作と傳えられる「王明君辭并序」であり、以後の王昭君觀の軌道を定めたといえよう。

我本漢家子　將適單于庭
……
殊類非所安　雖貴非所榮
父子見陵辱　對之慚且驚
殺身良不易　默默以苟生
……
昔爲匣中玉　今爲糞上英

朝花不足歡　甘與秋草并
傳語后世人　遠嫁難爲情

ここには、志願して塞外に嫁したという傳承の痕跡はなく、父子の妻となった「失節」をとがめる口吻も見られない。むしろ、政略結婚の犧牲となった女性の運命を淡々と敍述しているといってよい。この「序」に「昔公主嫁烏孫、令琵琶馬上作樂、以慰其道路之思。其送明君、亦必爾也」とあって、琵琶を新しい要素として加えているが、細君の傳に琵琶のことは見えない。傅玄の「琵琶序」に「漢送烏孫公主、念其道遠、思慕故國、故使知音者於馬上作之」に依るのかも知れないが、とすれば元封年間に烏孫に嫁した細君から三百五十年後の記述である。細君と昭君とは類比して見られていたように思われ、武帝と成帝の「從胡俗」の命令はそれぞれ發せられたのであろうが、類比に依る作爲の感を免れない。

李白の「王昭君」は、

漢家秦地月　流影照明妃
一上玉關道　天涯去不歸
……
生乏黃金枉圖畫　死留青冢使人嗟

と王昭君を借りて婉曲に賄賂の横行を風刺している。

また「于闐采花」では、

于闐采花人　自言花相似
明妃一朝西入胡　胡中美女多羞死
乃知漢地多名姝　胡中無花可方比
丹青能令醜者妍　無鹽翻在深宮裏
自古妒蛾眉　胡沙埋皓齒

と繪師などにたぶらかされる爲政者の無能をそしり、かなり露骨に具眼の士のないことを風刺している。

蘇軾はそれに輪をかけて、「昭君村」で次のようにいう。

昭君本楚人　艷色照江水
楚人不敢娶　謂是漢妃子
誰知去鄉國　萬里爲胡鬼
人言生女作門楣　昭君去時憂色衰
古來人事盡如此　反復縱横安可知

いずれも自身の經歷に卽して、王昭君を哀れんでいるのである。

これらは私憤を王昭君に託した氣味があるが、公憤として歌った例もある。則天武后に仕えた東方虬は、「王昭君」で、

漢道方全盛　朝廷足武臣
何須薄命女　辛苦事和親

と武臣の不甲斐なさを嘆き、[8] 安祿山軍に徹底抗戰をした顏眞卿の幕客をしたことのある戎昱は「詠詩」で、

漢家青史上　計拙是和親
社稷依明主　安危托婦人
豈能將玉貌　便擬靜胡塵
地下千年骨　誰爲輔佐臣

と政略結婚に依って安易に平和を求めた元帝の政策を非難している。これは昭君を哀れむ氣持ちの裏返しでもある。この發想に基づく作品は多く見られ、天子を直接指彈するのを避け、繪師毛延壽を惡の象徵とするものが多い。

だが、逆說的にではあるが、毛延壽の功績をあげるものもある。

元の王惲の「王昭君出塞圖」は、

絶色當年冠漢宮　誰移尤物使和戎
流連不重君王欲　延壽丹青似有功

つまり、天子を女色に溺れさせなかった功績を認めてよいではないかというのである。

明の李學道の「反昭君怨」は、

明妃恃有傾城色　不賂畫工空自惜
……
漢宮美人亦無數　買笑爭憐學歌舞
縱然恩寵傾六宮　珠鈿繡幕俱塵土
獨有明妃傳至今　騷人感咏詩成譜
當時不遇毛延壽　安得芳名播千古

など歴史に名を殘したのは、毛延壽に醜女に描かれたお蔭であるという。

唐の王叡の「解昭君怨」の

莫怨工人醜畫身　莫嫌明主遣和親
當時若不嫁胡虜　祇是宮中一舞人

は、やや含みのある表現である。舞人のひとりで終るかもしれなかったのが、毛延壽のお蔭で夫を得ることができたとするのである。

王安石は「明妃曲」で一歩進めて、

明妃初嫁與胡兒　氈車百輛皆胡姬
……
漢恩自淺胡自深　人生樂在相知心
可憐青冢已蕪沒　尚有哀絃留至今

と漢の冷宮から解放されて、人間としての幸福を獲得し、たとえ墓は荒れはてようと後世の多くの人の記憶に殘りうたいつがれているのはよい人生であったとするのである。

その他に、唐の汪遵は「昭君」で、

漢家天子鎭寰瀛　塞北羌胡未罷兵
猛將謀臣徒自貴　蛾眉一笑塞塵清

「猛將謀臣」の事なかれを風刺し、對照的に五、六十年にわたる平和をもたらした王昭君の功績をたたえる。

明の陳子龍は「王昭君」で、

……
穹廬亂南北　無由瞻漢京
漢宮君臣薄　胡人父子輕
豈欲惜一死　恐起胡漢爭
天子方厭戰　婦人聊苟生
……

とややタブーとなっているかに見える單于の父子の妻となったことを匂わせている。

以上は、文人の眼から見た王昭君像であると同時に、王昭君說話が敷衍擴大される方向を示唆している。

四

昭君劇は元明雜劇中に十篇近くあるが、現存するものの中では馬致遠の『漢宮秋』が代表作のようである。

作品の內容については、吉川幸次郎博士がつとに論じられているが、[8] 少々違う面から光をあててみたい。

まず、毛延壽が百人の美女集めという積極的役割を擔うこと。

「爲人雕心雁爪、做事欺大壓小」と性格を明示して伏線としていること。このことにより、すべての悪を元帝の側近に集中して政略結婚の色彩を薄めることになる。

元帝のために集めた美女の百人目に當たった農民の子である王昭君は、毛延壽の要求する賄賂を贈らなかったために冷宮に入れられ（これは毛延壽に課せられた美女集めの使命と矛盾する）、天子に召される機會を奪われるが、無聊をかこって彈く琵琶の音に引かれた元帝に發見されること。

毛延壽は、繪圖のからくりの問責を避けるために匈奴の地にのがれ、昭君の繪圖を呼韓邪單于に獻上して昭君を要求させること。

昭君は元帝の寵愛を既に受けていること。このことにより、昭君の遠嫁志願は「和番」のためが強調され、冷宮からの解放という側面を消滅させている。

昭君は漢と匈奴の國境を流れる黑龍江に投身自殺をして、貞節を守ること。

毛延壽は兩國和親の破壞者として漢に引き渡され、斬罪となること。

以上、側近の高官のいう「自古以來、多有因女色敗國」は、元帝の昭君溺愛ぶりからすれば十分割愛の理由たりうるが、保身のための口實という側面が強調されて天子の意にそわぬ消極面を、毛延壽に天子の意に反する積極面を擔わさせている。一方、昭君の側は天子の寵愛を受けたこと。そのため「從一而終」の貞女とされたことが新しい要素といえよう。

明人作『和戎記』は基本的には『漢宮秋』に依りながら、匈奴の軍に包圍されると昭君の身代わりとして、蕭善音を嫁せしめるという要素を加え、再度の來襲によって昭君が行くことになると、昭君は事前に毛延壽を單于の手で殺させてから匈奴の地に向い、烏江に投身自殺するという部分變更がされている。また、元帝の夢に現れた王昭君は、妹の秀眞の入内を申しでるという要素が加わる。

ここに至って、「難於失信」（『後漢書』）「名籍已定、帝重信於外國、故不復更人」（『西京雜記』）の士人のモラルは完全に破られるのである。[7]

五

次の詩は、王昭君が民衆の間で語られた情景を彷彿させる。

妖姫未著石榴裙　自道家連錦水濱
檀口解知千載事　清詞堪歎九秋文
翠眉顰處楚邊月　畫卷開時塞外雲
說盡綺羅當日恨　昭君傳意向文君（吉師老「看蜀女轉昭君變」）

「畫卷」とあるので、繪圖を持參しての語りとわかる。

現存する〈王昭君變文〉は冒頭部分が缺けているので、「遠嫁」にいたる經過は不明ではあるが、「如今以暮（慕）單于德、昔日遷祿（祿）漢帝恩」の句から元帝の寵愛を受けたことが推量される。

〈變文〉の主題は、昭君は單于によって煙脂皇后とされ、單于の愛情に包まれて暮らすが、望鄕の思いを募らせ、單于の手厚い看護にも句らず病死する。單于は直ちに漢王に知らせ、遺體は國境に匈奴のしきたりによって葬る。漢の側からは使者が弔問し哀帝の祭詞を捧げたところで終る。畫像のことは暗示されているが、子供のこと、再嫁のこと、自殺のことはなく、遠嫁した女性の心情と胡漢の平和をもたらした功績が頌えられる。[8]

語り物の系統では、清の雪樵主人の『昭君出塞雙鳥奇緣』四卷がある。これは全編を七二節に分け、七言の唱本のいわゆる木魚書であり、廣東付近で語られた〝曲藝〟である。ここで、新たに加わるのは、昭君の父は太守であり、昭君が纏足していること。冷宮に幽閉される理由が、獻上した繪圖の昭君の眼の下に毛延壽が青痣を加えて「これは君主に害を及ぼす面相である」と誣い、美人が寵愛を受けなかった理由の説明とするなどの工夫が見られるが、『和戎記』を下敷にしていることは明らかである。

六

近年になると、郭沫若の『王昭君』（一九二三年）と曹禺の『王昭君』（一九七八年）の二編の戲曲がある。前者は、毛延壽の娘を舞臺回しに登場させ、元帝の前に父の惡事を暴露して、元帝に身代りを立てさせようとするが、宮廷内部の醜惡さに愛想づかしをした昭君は、漢よりも單于との婚姻を選んで延壽の娘とともに匈奴の地へと立ち去る。毛延壽は斬罪になる。後者は、後宮で帝から召されないままに老齢を迎えて發狂した「孫美人」を眼にして單于との婚姻を望み、閼氏となってから匈奴の主戰派の陰謀を抑えて胡漢の和平を達成する女丈夫として描いている。これらは、いずれも『後漢書』により、昭君は志願して呼韓邪單于と結婚したという筋書によっている。とくに後者は、周恩來の委託を受けた少數民族對策のための作品であり、「士人」の立場からする王昭君像というべきであろう。

鄭慶歡氏によれば[8]、王昭君に關する地方劇を七種三四點入手したが、全本戲十八點中の十二點は『雙鳥奇緣』に依り、五點はそのヴァリエーションと見られ、一點のみ志願して匈奴に嫁した男勝りの女傑で匈奴の安危のために奮鬪し、胡漢の和睦に獻身するという筋書きであるという。ただし、これは「ある一人の知識人の手になる作品」とあるので例外とすれば、民衆の嗜好がどこにあったかは明らかであろう。

『王昭君傳說』[10]に依れば、オルドスの昭君廟の奇瑞が採錄されているが、一般に廟神は悲劇の主人公が多いので、昭君はその線上で受け入れられ、「遵命文學」と一線を畫しているといえよう。

王昭君が、劉細君や蔡琰に比べて作中人物とされることが壓倒的に多いのは、その身分によるところが大きく、同情の對象としやすいことが考えられる。しかし、王叡・王安石ら少數の例外を除いて、一生「宮中一舞人」として終るかも知れなかった後宮から解放され、「人生樂在相知心」の幸福な生活を獲得することに注目しなかったのは、女性を人間として遇しなかった時代性を示すとはいえ、異樣な感じを與える。その點からしても王安石の革新性を知ることができ、それ故、異端として攻擊されたのは當然といえる。

戲曲や小說が、史實に反して元帝が王昭君を寵愛し、「豈欲惜一死、恐起胡漢爭。天子方厭戰、婦人聊苟生」という陳子龍の同情もなく、匈奴の地に赴く途中で自殺をさせて「貞女」「烈女」とする（『漢宮秋』の場合は、元に對する反抗の意圖を汲み取ることができるが）のは、「時代思潮は支配者の思想を反映する」（茅盾『夜讀偶記』）とするならば、民衆の嗜好は支配者の嗜好にそったものであり、魯迅のいう「暴君治下の臣民」（『熱風』隨感錄六五）の性向によっていっそう加重されたものといえよう。元代から始まり明代の『和戎記』で完成した昭君像は、その意味でも興味がある。

注(1) 貂蟬が實在したかは不明であるが、呂布は董卓の誘いに依って刺史丁原を討って「父子」となった。(董卓は「少好俠」の人物ゆえ、義理の父子の誓いなどをしたのであろう)その義理の父を王允の董卓謀殺の計劃に荷擔する際のためらいに、「君の姓は呂であって、本來骨肉ではない」という王允のことばに簡單に應じた(『魏書』卷七)のでは説得的でないので、『三國志演義』で創作された人物かもしれない。しかし、それに當たる人物が存在したとして敷衍することは、虛構の世界では成功といえよう。

(2) 王昭君の作品として、「怨曠思惟歌」を『琴操』にあげるが、後人の僞作とされている。『樂府詩集』卷二九「琴曲歌辭」の「昭君怨」も王檣作とするが僞作であろう。

(3) 『漢書』匈奴傳下には、王昭君の兄の子の記事があるが、關係がないので省略に從う。

(4) 『後漢書』南匈奴傳に、王昭君の子が殺害された經過の記事があるが、省略に從う。

(5) 女帝を風刺しているようにも思われるが、作者の傳記が明らかでないので深讀みかもしれない。

(6) 吉川幸次郎「漢宮秋雜劇の文學性」(『日本中國學會報』第十七集)。ここで、吉川博士は、馬致遠の創作意圖を異民族支配に對する抵抗と、それにも增して天子みずからの「戀愛感情」の表白に求めておられる。天子もただの人ということで後者に、時代思潮という點で前者に贊成である。

(7) 『世說新語』賢媛では「名字已去、不欲中改、於是遂行」と同じ立場であるが、『琴操』では、昭君が單于へ嫁す志願をしたのを「(單于の)使者並見、不得止、乃賜單于」とあってニュアンスが違う。この書の素性を窺わせる記述といえよう。

(8) 敦煌で發見された變文は、その地方色が濃厚であったと思われ、「王昭君變文」もその例に漏れないと考えているが、確證を得るに至らなかった。博雅の士の敎示が得られれば幸いである。

(9) 「中國傳統戲中の王昭君戲——民俗研究資料の一例——」(遊佐昇譯)酒井忠夫・福井文雅・山田利明編『日本・中國の宗敎文化の研究』一九九一年、平河出版社に依る。これらの原作品を見ることができないので確信はないが、大筋に影響はないであろう。

(10) 吳一虹・吳碧雲編、一九八三年 甘肅人民出版社。王昭君に關する傳承を故鄕の湖北省と內蒙古を中心に收集したものであるが、「和親」という國策に反する傳承はない。